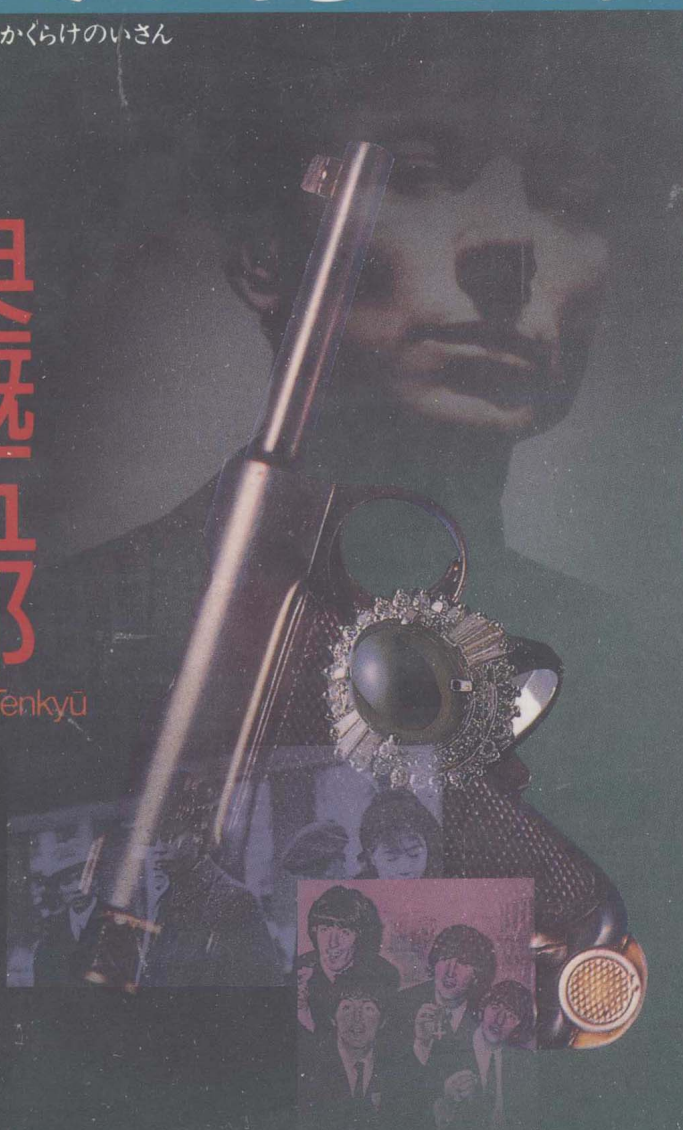


家羅覺新愛の遺産

あいしんかぐらけのいさん

典厩五郎

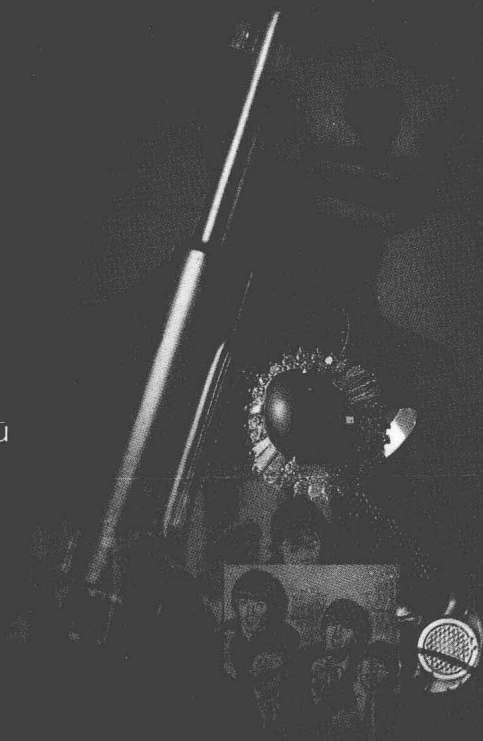
Gorō Tenkyū



家羅覺新愛 の遺産

典廐五郎

Gorō Tenkyū



愛新覺羅家の遺産

著者―典厩五郎 発行者―井上功夫

発行所―株式会社双葉社 東京都新宿区東五軒町三―二八 郵便番号一六二

電話・東京(〇三)五二六一―四八一八(営業)

(〇三)五二六一―四八三三(編集)

振替・東京八―一七二九九

印刷所―大日本印刷株式会社 製本所―株式会社若林製本工場

落丁・乱丁の場合は本社にておとりかえいたします。

●定価はカバーに表示してあります

© 典厩五郎 一九九二年 Printed in Japan

ISBN 4-575-23100-2 C 0093

長編・愛新覺羅家の遺産——目次

一九六六年六月二十九日(水曜日)
ビートルズ来日第一日……………6

一九六六年六月三十日(木曜日)
ビートルズ来日第二日……………71

一九六六年七月一日(金曜日)
ビートルズ来日第三日……………118

一九六六年七月二日(土曜日)
ビートルズ来日第四日……………176

一九六六年七月三日(日曜日)
ビートルズ来日第五日……………231

装画·装幀 辰巳四郎

愛新覺羅家の遺産

はげしい雨滴が夜の窓を叩いた。

防音装置をほどこされた厚い壁のせいで、風の音こそ聞こえなかったが、どうやら東京は暴風雨圏に入ったようだ。

だがいまの平林洋之助にとって、そんなことはどうでもよかった。

「待ってくれ！」

ガウン姿の平林は、恐怖の目を見開いて叫んだ。

男が拳銃のトリガーを引いたからだ。この男は本気だ、本気でこの俺を殺そうとしている！

「嘘ではない、誓って嘘ではない。七夕^{なつたけ}までは待てなかったんだ」

男が握っている拳銃は、かつては平林自身、片時も肌身から離さなかった南部式の乙型自動拳銃だった。

「事情を説明する。話だけでも聞いてくれ、お願いだ——」

瞬間、轟音とともに平林の体は壁に叩きつけられた。思わず胸をまさぐる。手のひらはべつとりと血で染まっていた。

痛覚よりも驚愕の方が大きかった。恐慌と混乱。まもなく意識がぼやけた——

一九六六年六月二十九日（水曜日）

ビートルズ来日第一日

1

午前八時二十分。

「南条さん」

ドアにノックがして、階下二号室の小野が顔を出した。これから出勤するところらしく、制服姿だった。

「あれ、こんな時間だというのにまだ寝てるんですか」

「ゆうべ遅かったんだよ」

「なにか事件だったんですね」

中野駅前の交番に配属されたばかりの新米警官小野が、好奇にあふれた目を輝かす。

「酔っ払い同士のつまらんケンカだよ」

「でもいいなあ、ぼくも一度でいいから本庁の刑事ザカになってみたいですよ」

「小野君、もうひと眠りさせてくれよ。今日は緊急の事件でも起こらないかぎり、出勤は午後からでいいんだ」

「どうもその緊急の事件みたいですよ。本庁から電話が入ってます」

「なんだって？」

南条和雄はむっくりと寢床から起き上がった。

「さきにそれをいつてくれよ」

パジャマ姿のまま急いで廊下へ出ると階段を降りて電話に出た。

「もしもし、南条です」

「早朝からすまんが殺人だ。すぐに臨場してくれ」

南条が所属する第七号室(七班)の部屋長こと板山部長刑事のドラ声を受話器に響いた。

急ぎ、新井薬師にほど近い警視庁独身寮をとび出す。

空は曇っていたが、台風一過、清々しい朝だった。

中野駅まで歩いて十分。事件現場は渋谷区南平台の高級マンションだ。

「お早うございます」

前方から自転車であつてきた顔見知りの若い警官が、敬礼をして通りすぎる。警官というより、近くの野方警察署で職場実習をしている警察学校の学生である。

なにしろ中野周辺には警官がやたらと多い。まさに犬も歩けばなんとやらだ。それもそのはず、野方警察署の裏手には、警察学校と警察大学校があるからだった。

日本全国広しといえども、これほど警官がウロウロしているご町内はほかにはないだろう。中野周辺で空巢に入る泥棒は、よほどの間抜けか世間知らずにちがいない。

南条自身、四年前にその警察学校を出たばかりだった。それ以前は、普通の大学を出て普通のサラリーマンをしていた。が、サラリーマン生活には二年間で見切りをつけた。理由は二つあった。

一つは、判で押したような単調な毎日にあきたりなくなったこと。そしてもう一つは、父親が警察官だったことがおそらく潜在的な理由であろう。

熊本の田舎で警察署長をしていた父に転職の決意を手紙で伝えると、父はめずらしく興奮して電話をかけてきて、大いに激励してくれた。

警察学校を出たあと、杉並の警察署に配属される。

一年後、巡査部長の昇進試験を受けたが見事にすべった。その翌年も失敗し、三年目にしてようやく合格を果たす。

だが、ほっとしたのもつかの間、その年の暮れのある日、南条は署長に呼ばれて仰天した。警視庁捜査一課への転属を告げられたからだだった。

なにかのまちがいだと思えなかった。天下の警視庁への転属だけでも大事であるのに、泣く子もだまる捜査一課とは――

理由として考えられるのは、二回の失敗に懲りて猛勉強した結果、巡査部長の昇進試験の成績がきわめて優秀だったことくらいだ。署長も、おそらくそれが原因で本庁が引っぱってくれたのだろうといっていた。

南条は正月にひさしぶりで帰省すると、すでに停年退職して恩給生活に入っていた父に、驚天動地の転属を告げた。

父はボカンと口をあけてその事実を聞いたあと、世にも悲しげな顔でボツンとつぶやいたものだ。

「世も末だな。天下の警視庁もそこまで人材が払底したか」

南条は住宅街を抜けて早稲田通りへ出た。中野駅まではあと五分たらずだ。

それにしても、仮病をつかって休暇をとらなくてよかったと、いまさらながらほっとした。

「おどろかないでね。ビートルズ公演の入場券が手に入ったのよ。しかも二枚もよ！」

恋人の牧村朝子から「大事件」にもまさる電話があったのは先週のことだ。

はじめはてっきり冗談だとおもった。ビートルズ公演はプラチナ・ペーパーもいいところだったから。マスコミも連日のようにその異常事態を報じていた。

（朝日新聞、六月十九日付朝刊）

熱気はらむビートルズ来日

十八万人があぶれる

ヘボピュラー音楽の雄、ビートルズが来ることになった。五月三日にその発表があると、たちまち入場希望者が殺到、一週間で二十三万人からの申込みが主催者の読売新聞に集った。六月三十日から五

回にわたって日本武道館で公演するので、入場できるのは計五万人。ざっと十八万人があぶれることになる。「一ヵ月前からでも並ぶ」というファンが多いので入場券は抽選になったが、十人が二時間ばかりで、ようやくはがきをさばいたという。なんとも大変な騒ぎである。

自慢ではないが、じつは南条はビートルズの「隠れ」大ファンだった。

杉並の警察署にいた頃は、公然とビートルズのファンを名乗ってもどうということではなかった。だが現在、事情はまったく異なってしまうている。

もつともまずいことには、もはやビートルズは単なるポピュラー・アーティストではなく、反体制側の英雄に祭り上げられてしまっていることだった。

年配者はビートルズと聞いただけで憎悪を剥き出しにする。まして頭のかたい警視庁のオエラ方にとって、ビートルズ・ファンなどは不良どもの集まりにすぎず、取り締まりの対象以外のなものでもないであろう。南条としては「隠れ」ファンに徹するほかなかったのである。

たしかに常識ある大人から見れば、狂気の沙汰としか思えないビートルズ・ファンの行動は、連日のように世界中のマスコミをにぎわしている。ビートルズ来日が決定してからは、それまで比較のおとなしかった日本のハイティーン・ファンもようやく動きを見せはじめた。

（朝日新聞、六月二十日付朝刊）

ファンの家出目立つ

警視庁、都内で一斉補導

〈警視庁少年一課は、二十日朝から銀座、新宿など東京都内の盛り場で少年少女のいっせいの補導を行い、六百八十三人を補導した。〉

このうち四十六人は家出人だが、ビートルズに会うため札幌から家出してきた十七歳の少女二人、東京に就職して「ビートルズ」の来日を待ったため大阪から家出してきた十六歳の少年二人など、ビートルズ・ファンの家出が目立っていた。〉

ここにいたって、警視庁はようやくコトの重大性に目覚め、警備部を中心とする総合警備本部を設置することになった。

(朝日新聞、六月二十一日付朝刊)

警備も大海戦術で

ビートルズ対策決る

へ「たかが四人の歌うたいのために……」としぶい顔をしながら警視庁は二十日ビートルズ対策会議

を開き、エレキ・プームの元祖、英国の「ザ・ビートルズ」の一行四人が二十八日来日して帰るまでの六日間、機動隊など延べ三万五千人を動員することにした。

この日警視庁に集った各署長、機動隊長らは「ビートルズというのは男なのか、女なのか」「むすめたちは、あんなものになぜ大喜びするのか」などと、苦々しい顔で、あまり乗気にならぬ様子だったが、昨年十一月、東京・丸の内で行った一行の出演した映画に数千人のファンが集って騒動になったり、ニューヨーク空港でも数千人のファンが出迎えに集って大騒動になったなど、油断のできない実例が披露されて、ついに「安保」「日韓」を除いては警視庁創設以来といわれる大規模な「ビートルズ作戦」を練り、総合警備本部を二十八日に発足させることを決めた。

二十八日、一行が到着する羽田空港には機動隊など三千人を動員し、空港入口の穴守橋、弁天橋に検問所を設けてビートルズ・ファンだけは入場させない。

宿舎の千代田区内のホテルまでは、コースは警視庁内でも秘密にし、本部からの指令によって「流動的」に沿道警戒に当る。ホテルは、婦警さんも含む二千人で警戒するので、沿道、ホテルなどで「ビートルズ」に面会しようと思っても絶対不可能。

公演はいずれも九段の武道館で三十日から七月二日までの三日間計五回行われ、入場者は計五万人と見込まれる。

このため、ホテルを連日、二千人でとり囲むほか、会場にも連日二千二百人を動員する。このうち婦警さんなど三百五十人は場内の最前列に陣どつて、舞台に上がろうとするファンを阻止する。さらに、皇居のお堀にはボートを用意し、落ちたファンを救う。

かくして警視庁がまなじりを決して「ビートルズ作戦」の検討をはじめた六月二十三日、いよいよビートルズは日本公演にむけてイギリスを出発したが、途中、西ドイツのハンブルク公演でファンが暴発して警官隊と衝突、百十七人の逮捕者が出る騒ぎになった。

警視庁の警備担当者たちは、厄介者の来日をため息をつく思いで待ちかまえている。

(朝日新聞、六月二十八日付朝刊)

日本へ出発

ビートルズ

へ(ハンブルク(西ドイツ)二十七日発)AP)ビートルズの一行は二十七日、西独演奏旅行を終り、次の演奏地である日本に向け日航機で出発した。ハンブルク空港には、おりからの大雨について数百人のファンが押しかけ、嚴重な警官隊の警備の目を盗んで滑走路に飛出するほど熱狂的な見送り風景だった。

牧村朝子から電話があつたのは、そのような状況下においてである。

一時は仮病をつかって休暇をとり、ビートルズ公演に行くことも考えた南条だが、結局は泣く泣く

あきらめた。よりにもよって、ビートルズ来日の週は「事件番」にあたっていることに気づいたからだ。

警視庁捜査一課にあつて、殺人・傷害・強盗を扱う第一係と第二係は、約十班ほどの班によつて編成されている。その班は一週間ごとの当番制になつており、当番期間中に事件が起これば当番班がその事件を担当する。その当番班を庁内では事件番と呼んでいた。

したがつて事件番にあたつた班の刑事たちは、いついかなる時でも現場に駆けつけられるよう、つねに居所をあきらかにしておかなければならない。べつの班に交代する日曜日の午前九時まで、片時も気が休まらない緊張の日々の連続だった。

いまにして、われながら因果な職業を選んだと思わぬでもなかったが、自分で決断して選択したからには、だれに泣きごとをいうわけにもいかなかった。

中野駅前の商店街は、昨夜の台風4号で荒れ放題だった。

百人近い死傷者を出して去つた台風4号のあとは、ビートルズ台風が日本を襲うことになるわけだ。本来ならビートルズはきのうの夕方到着しているはずだったが、台風4号の影響で来日は大巾におくられていた。

（朝日新聞、六月二十八日付夕刊）

本物の台風へ警戒を切替え